

1945年千葉市 犠牲者数は未確定

名簿に刻む

空襲の記憶

1945年の米軍による千葉市への空襲で、犠牲になった市民の名前を確認・記録して死者を悼み、戦災の記憶をとどめようと、千葉市の市民団体「千葉市空襲と戦争を語る会」が名簿作りを続けている。同会では、犠牲者の遺族などに情報提供を求めている。

千葉市への大規模空襲は、45年6月10日と7月7日に行われ、米軍資料などによると、爆撃機B29など計156機が来襲した。犠牲者数には諸説あり、同会によると、昭和天皇に奏上された890人説のほか、945人とする説もある。千葉市は死者名簿を保有していないが、死傷者は1595人としている。

同会の創設メンバーらは2009年秋、約120人の証言や遺稿を集めた戦争体験集「千葉市大空襲とアジア・太平洋戦争の記録」100人の証言」を出版し

市民団体が情報提供呼びかけ

た。編集委員も務めた伊藤章夫さん(69)は、編集が進むに従い、名簿作りに取り組まなければとの思いが募ったという。

「きちんとした名簿がないから、犠牲者の数も確定できない。亡くなった人たちの名前もわからないままでは、あの戦争は終わらない」と話す。

2年前から、「100人の証言」で掲載した戦争体験者に協力を求めたり、市内の慰霊碑を訪ね歩いたりして、347人の名前を確認した。東京から疎開中に機銃で亡くなったとみられる3歳と1歳の姉と弟、焼夷弾攻撃を受けた親子4人、学校で被弾した女子学生の名前などもあったという。

名簿作りについては、空襲体験者の記憶を紙芝居で上演する活動を続けている。「ちは・戦争体験を伝える会」(市川まり子代表)も



「死者を数字で悼むのではなく、『誰が亡くなった』というのを具体的に残さなければ」と話す伊藤さん

協力しており、両団体は調査を進める一方、市に対し、市の事業として名簿作成を進めることや、記念碑を建てることも求めている。

終戦から間もなく66年。伊藤さんは「一般の人たちの関心は薄いかもしいれないが、ここを乗り越えたい。いつまでも中途半端なままではいけない」と訴えている。情報提供などは伊藤さん(080・5305・3739)。